

# 斎藤勇見彦『欧州御巡回中日記』に見られる 徳川頼倫一行のイスタンブル訪問

奥山直司

キーワード：『欧州御巡回中日記』、徳川頼倫、斎藤勇見彦、山田寅次郎、イスタンブル

## はじめに

『欧州御巡回中日記』（稿本、個人蔵、以下『御巡回日記』と略する）は、1896年（明治29）3月から1897年11月にかけて行われた紀州徳川家の世子（のちの第15代）、徳川頼倫（1872-1925）一行の欧米巡回の記録である。これは、鎌田栄吉（1857-1934）と共に頼倫に随行した斎藤勇見彦（?-1917）<sup>(1)</sup>が旅先から東京麻布の紀州徳川家本邸に数日分から2週間分位ずつ送った日記とこれに添えた書簡とを2巻に製本したものである。このうち日記は、送付1回分毎に、「通報」として冒頭に通し番号が朱書きされており、書簡には同じく朱筆でその号外と記されている。

『御巡回日記』の研究は、管見の及ぶ限り、ロンドン滞在中の一逸話<sup>(2)</sup>を取り上げた吉永（2005）を除いて、他に存在しない。本文の公表も、吉永がこの逸話に関連する範囲で行ったものがすべてと考えられる。

この旅行から生まれた著作として、従来、鎌田栄吉の『欧米漫遊雑記』（以下『漫遊雑記』と略する）が知られている。これは専ら鎌田個人の見聞と批評を綴ったもので、全体として、何時どこで何をしたかという旅行記録としての詳細に乏しい。頼倫と斎藤の動静にも何故か触れることがない。それどころか、3人が写った口絵写真を見なければ、これが旧主家の若様への随行の産物であることにすら容易には気づかないほどである。

これに対して、『御巡回日記』は、日記においては一行の日々の行動を、斎藤自身の見聞や所感を交えて記録し、書簡においては型通りの時候の挨拶と機嫌伺いの後に頼倫の様子、今後の予定等を報告したものである。日記と書簡は共に「御令扶様御中」の宛先を有している。この場合の令扶とは、紀州徳川家に仕える家令と家扶を指している。こうして名指しは避けているものの、これらが、当主徳川茂承（1844-1906）を始めとする紀州徳川家の人々に読まれることを前提に綴られたものであることは明らかである。特に日記は、書字が極めて丁寧で、所々に割注が付され、漢字にはしばしば読み仮名が施されている。またその内容は、決して堅苦しいものではなく、時には自作の詩歌（和歌、俳句、漢詩、興が乗れば戯れ歌も）を挟んだり、途中で文体を変えたりして、自ら楽しみ、読む者をも楽しませるように工夫がなされている。そこには斎藤勇見彦という人物の抑制の効いたサービス精神やユーモアのセンス、そして何より紀州徳川家の人々に対する敬愛が感じられる。『御巡回日記』は、日記と書簡を合わせた全体が、まさに彼らのために書かれたものであり、新聞・雑誌の連載をまとめた『漫遊雑記』とは執筆動機から異なっていると言えることができる。

『御巡回日記』全体に関するこれ以上の考察は別稿を期することとし、以下においては、頼倫一行のイスタンブル（斎藤は一貫してコンスタンチノーブル〔君士但丁〕と呼ぶ）訪問を取

り上げ、『御巡回日記』に基づいてその概略を明らかにすると同時に、滞在中の日記の翻刻を提示したい。従来この訪問に関しては、鎌田の『漫遊雑記』の記事が明治期の日本人のトルコ観の一例として取り上げられ（白岩 1999；長場 2000）、また山田寅次郎（1866-1957）が勤務したイスタンブルの中村商店の研究（デュンダル・三沢2009）でも言及されているが、資料の不足からその全貌は不明であった。『御巡回日記』はこの不足を補うものである。

### 1. 頼倫一行のイスタンブル滞在と山田寅次郎による接遇

『御巡回日記』中、頼倫一行のイスタンブル訪問の記事が含まれている日記と書簡を綴じられている順序に並べると次のようになる。

\* 通報第37号号外：明治29年12月13日付イスタンブル発書簡

\* 通報第37号：明治29年11月29日から12月13日までの日記

\* 通報第38号：明治29年12月14日から12月24日までの日記

日記によれば、一行がブルガリアのソフィアから乗った列車でイスタンブルに着いたのは1896年12月5日、イスタンブルから船でギリシアのピレウス港に向かったのは同年12月15日のことである。この11日間の一行の行動は、日記によれば凡そ次のようである（現地人名の日本語表記は日記のそれに従う）。

#### 12月5日(土)

正午前、コンスタンティノーブル停車場（シルケジ駅）に到着する。馬車2台を雇い、ペラ・パラス・ホテルに投宿。午後2時頃から6時頃まで、山田寅次郎の案内でセントソフィー寺（アヤソフィア大聖堂）を含む諸所を見学する。山田の商店を訪れてからホテルに戻り、4人で会食した後、11時までトルコ談議。

#### 12月6日(日)

ボスポラス海峡で舟遊びをした後、山田が懇

意にしている商工会議所書記長スピルキー・アレキサンドリッジ（Spiruki Alexandridi）<sup>(3)</sup>宅で饗応を受ける。返礼として彼をペラ・パラス・ホテルでの晚餐に招待する。

#### 12月7日(月)

山田の紹介で陸軍中将アホメット・アリー・パシャ（Ahmed Ali Paşa）、外務大臣テーフイク・パシャ（Tevfik Paşa）、参事院議長サイド・パシャ（Said Paşa）、陸軍武官侍従大佐外国人接待掛長マホメット・ベー（Mehmed Bey）<sup>(4)</sup>に面会。また古物館（考古学博物館）を見学。山田と共にロンドン・ホテル（Hotel de Londres）で晚餐を取ってから帰宿。

#### 12月8日(火)

山田の商店を訪れてから、山田の案内で、宮内省式部局に式部長官ミュニール・パシャ（Münir Paşa）を訪ねて、宮殿の拝観を委託。それから郊外に馬車を走らせ、市中で写真帳等を購入した後、山田と別れて帰宿。留守中にアホメット・アリー・パシャとミュニール・パシャが名刺を置いていった。

#### 12月9日(水)

太子島（プリンスイズ諸島）見物のために早起するが、波が高いために断念し、舟でアジア側に渡って、予備役海軍少将ハッキー・パシャ（Hakkı Paşa）宅を訪ねる。その後灯台岬で太子島等の島々を望見し、山頂からマルマラ海とボスポラス海峡のパノラマを楽しんだ後、ヨーロッパ側に渡って帰宿。終日馬車と舟に揺られて疲労した。

#### 12月10日(木)

ミュニール・パシャの上書で皇帝の許可が下り、近衛騎兵少佐メフメット・アリー・ベー（Mehmed Ali Bey）の案内で、旧宮殿（トプカプ宮殿）と新宮殿（ドルマバフチェ宮殿）を拝観。アホメット・アリー・パシャをホテルに招待し、山田も呼んで晚餐を共にする。その後深更までトルコ談議。

#### 12月11日(金)

7日にマホメット・ベーに依頼した皇帝アブ

デュルハミト2世の金曜礼拝の行列の拝観が許可され、午前11時頃から、星月城（ユルドゥズ宮殿）内の寺院（ハミディエ・モスク）に参詣する行列を真向いの接待館から見る。午後2時頃ホテルに帰る。

#### 12月12日(土)

荒天のため終日ホテルに留まる。夜、山田が話しにくる。

#### 12月13日(日)

10日の招待の返礼か、アホメット・アリー・パシャに午餐に招かれる。その後郊外を散策し、弦楽の演奏を聴くなどして遅く帰宿。

#### 12月14日(月)

横浜正金銀行ロンドン支店から送られた電報が替をオスマン銀行から受領した後、イスタンブルで知り合った貴顕紳士たちを訪問して暇乞いをする。

#### 12月15日(火)

午後3時にホテルを出て、山田に見送られてオーストリア・ロイド会社のエスペロー号に乗船。午後5時出航。

以上を通覧すると、イスタンブル滞在中の頼倫一行は、毎日のように山田寅次郎に会い、その世話を受けていたことが分かる。日記に山田の名前が出てこない日であっても、例えば12月9日の一行の行動が山田の案内なしに実現したとは到底考えられない。一行に対する山田の役割は、名所案内、人物紹介、トルコ事情の提供の3つである。一行は、山田に案内されてイスタンブルとその近郊の名所を見物し、山田の紹介で各界の名士の知遇を得、山田の語るトルコ談義に時の経つのを忘れたのである。このようなあり方は、5ヵ月前の7月12日にイスタンブルに来て13日間滞在した朝比奈知泉（1862-1939）と望月小太郎（1866-1927）の場合も、4ヵ月前の8月11日に着いて8日間滞在した田健治郎（1855-1930）一行の場合も、そして1ヵ月半前の10月22日に到着して9日間滞在した徳富蘇峰（1863-1957）と深井英五（1871-1945）の

場合も、さして変わらないものであったと推測される<sup>(5)</sup>。当時の山田は、店を独りで切り回していたらしく、ガイドとの掛け持ちの忙しさはかなりのものであったと思われる<sup>(6)</sup>。

山田はまた一行が土産品として購入したトルコ絨毯の日本への送付手続きを代行している。『御巡回日記』12月13日付書簡（通報第37号号外）には次のようにある。

土耳其当府には別に差したる工業品は無之候得ども絨緞<sup>(7)</sup>はとるこじゆふたんと申して名高きよしに付彼れ是れ搜索、御帰館之際の御土産品の一部として購求、当府に日本雑貨店を開ける唯一の日本人山田寅次郎氏之手より御邸宛にて船積証書と共に御送附申上候間例之開通合名会社え御依頼之上、横浜港着、御請取之御手續被成下度絨緞<sup>(8)</sup>は我畳み二じよふ敷ばかりのもの五枚にして原価は三百式十法に御座候、御受領之上は御あらため御大切に御帰朝迄御預り御仕舞置き被下度願上候。五枚之内御用品三枚余り一枚づゝは鎌田と小生の分に御座候。

それでは、頼倫一行は、どのようにして山田と知り合ったのだろうか。デュンダル・三沢（2009：188，217）は、山田が徳富蘇峰に宛てた同年11月20日付の書簡の末尾にロシア滞在中の朝比奈知泉から山田に届いた書簡の一節が引用されており、そこに朝比奈が頼倫と陸軍少将寺内正毅（1852-1919）にイスタンブル行を勧めた旨のことが書かれていることを明らかにしている。『御巡回日記』によれば、頼倫一行は、同年11月6日から11月13日までサントペテルブルクに滞在した。その間に朝比奈と何度か会い、最後には彼に見送られてモスクワ行の列車に乗っている。朝比奈が頼倫にイスタンブル行を勧めたとすれば、それはこの期間を措いて他にはない。またその折朝比奈が山田の名前を出さないはずはない。朝比奈の進言が一行の旅行計

画にどれほど影響したかは今のところはっきりしないが、一行と山田を繋いだのは、やはり朝比奈と考えてよいだろう<sup>(9)</sup>。

なお、頼倫一行のイスタンブル出発を日記に従って1896年12月15日とすれば、その2日後に到着して6日間滞在したという寺内正毅と副官として同行した陸軍大尉立花小一郎(1861-1929)のイスタンブル滞在は、12月17日から22日、もしくは23日までとすることができる<sup>(10)</sup>。また、『御巡回日記』と『漫遊雑記』(p.258)が口を揃えて、山田をイスタンブル在留の唯一の日本人としていることから、イスタンブル中村商店への出資者である中村健次郎は、一行の滞在中にはまだイスタンブルに到着していなかったと考えられる<sup>(11)</sup>。

## 2. 山田寅次郎と中村商店

前節で述べたような山田の接待が頼倫一行を満足させたことは、日記の好意的な筆致からも明らかである。しかし、これはただ世話になったからということではない。祖国から遠く離れたトルコで唯一人活動する日本男児の心意気に打たれたからである。そのことは、別れ際に斎藤が山田に寄せたという、12月15日の日記に記された次の2首によく表れている。

君ならでことをとるこに人はなしいとひた  
まへよ我国のため  
一と本もさすがやまとの菊なればたれおと  
らじと匂ひぬるかな

筆者は、これらが、徳富蘇峰、鎌田栄吉、寺内正毅等の揮毫と並んで、山田の『土耳其画観』に収録されなかったことを残念に感じている。

次に、山田が主管を務めていた中村商店について、『御巡回日記』から分かることを述べたい。デュンダル・三沢(2009:187)によれば、朝比奈、望月、徳富、深井はいずれも中村商店の様子について言及していない。その意味でも、次に引用する12月5日の日記の一節は貴重な証

言と言えよう。

土耳其に日本人の雑貨商を開けるは大坂商人の山田寅次郎と云へる人のみにして外に御国人一人もなくわれわれ一行も矢張り此仁をたよりにて着、<sup>(ママ)</sup> 早々午後二時頃より全六時迄諸所をざつと案内され最後に山田の商店えもゆきて漆器、陶器、蒔絵もの、花鳥の縫箔<sup>みいばく</sup>ある机掛け等大坂、西京、神戸、尾張出来の粗末のものを見たり。粗末にしていやみたつぶりの安直品が能く売れると云ふ。特に面白るきは寒向きのものに我国の懐炉二銭五厘ばかりの品が式法五十参[割注：我金壺円余]にて飛ぶが如しと。これは同商店一手販売にて外人の奇を好む伝へつたへてわれもかれもと今は貴紳令嬢令夫人のこれを懐中せざるなしと。珍話といふべし。

『御巡回日記』には「山田の商店」とあるのみで、中村商店の名は一度も出てこない。しかし、上の引用において山田が「大坂商人」とされていることは、山田と大阪の中村一族との関係を示唆するものと考えられる。おそらく斎藤勇見彦は、大阪資本の商人という意味で山田をこのように呼んだのであろう。

次に、この店の品揃えの記述は、この頃の中村商店が日本趣味の安手の雑貨を多く取り扱っており、それがトルコ人の顧客に受けていたらしいことを伝えている。これを評した「粗末にしていやみたつぶりの安直品が能く売れる」との言葉は伝聞の形になっている。これはあるいは自嘲気味に語った山田の口吻を写したのかもしれない。また季節柄、懐炉が珍重され、2フラン50サンチームの高値にもかかわらず飛ぶように売れていた。トルコ人には物珍しい日本雑貨の一手販売がこの店の繁盛を支えていたと言えるだろう。

3. 『御巡回日記』 1896年12月5日～12月15日  
翻刻文

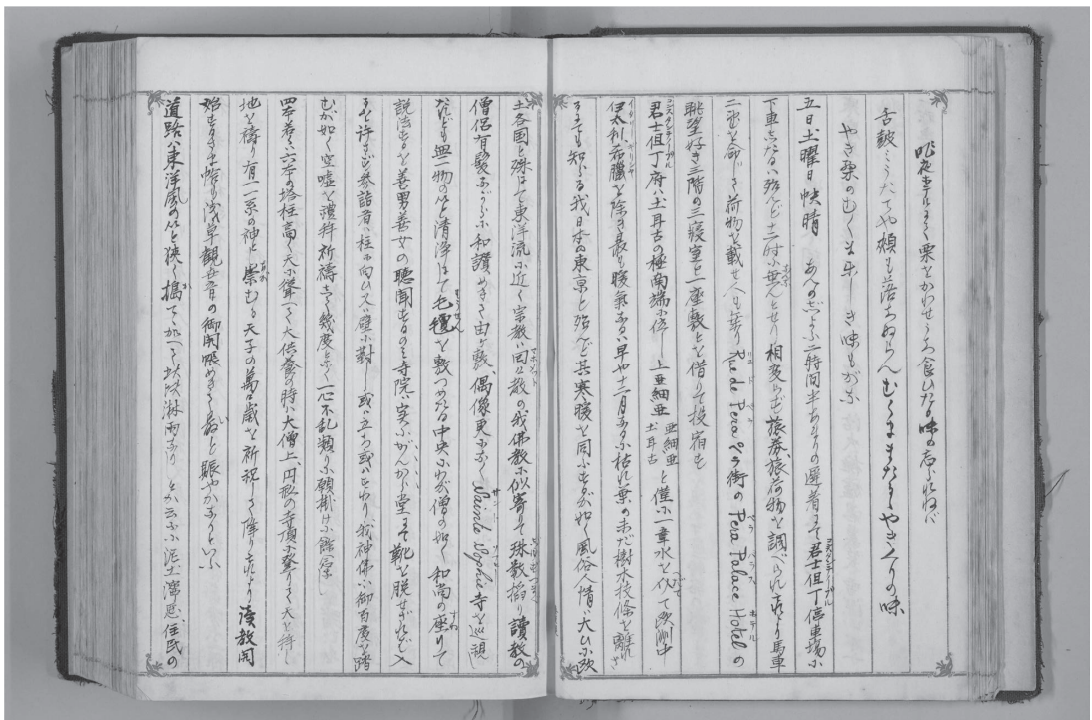
以下に掲げるのは、『御巡回日記』中、通報第37、38号に含まれる、頼倫一行がイスタンブルに滞在していた1896年12月5日から12月15日までの日記の翻刻である。翻刻に当たっては、

- 一 原文は縦書きであるが、以下ではそれを横書きに改めた。
- 一 漢字は原則として新漢字を用いた。
- 一 誤字・当て字と見られるものもできるだけそのままにしたが、他の漢字で代替し、原字の形を注記したものもある。
- 一 仮名づかいは原文のままとした。
- 一 変体仮名は悉、エを除いて現在一般に用いられている仮名に改めた。
- 一 読み仮名はすべて原文のものである。
- 一 2字以上の反復を示す記号「く」は使用せず、そのままを繰り返した。

- 一 文末に原文にはない句点を打った。読点(本稿ではコンマ)は原文通りである。
- 一 割注は〔割注： 〕として示した。

通報第37号

五日 土曜日 快晴 あんのじよふ二時間半あまりの遅着にて<sup>コンスタンチノープル</sup>君士但丁停車場に下車したるは殆んど十二時に<sup>なんな</sup>垂んとせり。相変らず旅券、旅荷物を調べられそれより馬車二台を命じて荷物を載せ人も乗り<sup>リュドペラ</sup>Rue de Peraペラ街のPera Palace Hotelの眺望好き三階の三寢室と一座敷とを借りて投宿す。  
君士但丁府は<sup>コンスタンチノープル</sup>土耳其の極南端に位し上亜細亜〔割注：<sup>ヘダテ</sup>亜細亜土耳其〕と僅に一韋水<sup>マホメット</sup>を介て<sup>イタリー</sup>歐洲中伊太利、<sup>ギリシヤ</sup>希臘を除き最も暖気なるは早や十二月なるに枯れ葉の未だ樹木枝条を離れざるにても知らる。我日本の東京と殆んど其寒暖を同ふするが如く風俗人情は大ひに<sup>マホメット</sup>欧土各国と殊にして東洋流に近く宗教は回々教の我仏教に似



『欧州御巡回中日記』 原本1896年12月4日、5日の日記(部分)

寄りて珠数揃り読教の僧侶有髪ながらに和讃めきて由ヶ敷、偶像更になくSainte Sophie寺を巡視したれども無一物のいと清浄にして毛氈を敷つめたる中央にわが僧の如く和尚の座りて説法するを善男善女の聴聞するのみ。寺院は実にかんから堂にて靴を脱せざれば入るを許さず。参詣者は柱に向ひ又は壁に対し或は立ち或はすわり、我神仏に御百度を踏むが如く空嘘を礼拝祈禱して幾度となく一心不乱頻りに願掛けに余念なし。

四本若くは六本の塔柱高く天に聳へて大供養の時は大僧上、円形の寺頂に登りて天を拜し地を祈り有一一系の神とし崇むる天子の万々歳を祈祝して降りそれより読教開始するさま恰<sup>(12)</sup>も浅草観世音の御開帳めきて最と賑やかなりといふ。

道路は東洋風のいと狭く搗て、加へて此頃淋雨なりしとか云ふに泥土濘悪、住民の家屋は汚穢極まれども居留外人の商店巨館、流石に又見べく巴里と云ひ倫敦と称し若くは伯林、維也納と呼べどもわれわれ日本人の目には清不潔の差はあれども皆な一樣に見へて変化なく一音律を奏する如く一本調子の更らに面白味を感じざりしが露国に到り初めて一種不可思議の思ひをなし今又此土耳其に着きて大ひに感情を深めたり。英仏独は多く我大和民人の往来する所なれども土露兩國の地を踏むは本年大分日本人の来りたりとは云へ未だ稀れに見る所にして無定約国の亜爾弥亜時件等多少の危険はあれども彼の明治廿二年土耳其沈没船を我比叡、金剛の両軍艦にて送り還したる後ちは大ひに我れに好意を表して日本は英仏に優る仁義開化の国なりと喋々し修好定約を訂結せんと皇帝より業に既に詔諭を發し給ひたる程なりと。我公使館を置き領事館を開くに先だち土耳其の事情を知悉する為め我国民の普く足跡を此国に印して能く其語に通じ風俗人情を探究せんことを勧告せんのみ。土耳其に日本人の雜貨店を開けるは大坂商人の山田寅次郎と云へる人のみにして外に御国人一人もなくわれわれ一行も矢張り此仁をたよりて

着、<sup>(ママ)</sup> 早々午后二時頃より全六時迄諸所をぞつと案内され最後に山田の商店えもゆきて漆器、陶器、蒔絵もの、花鳥の縫箔ある机掛け等大坂、西京、神戸、尾張出来の粗末のものを見たり。粗末にしていやみたつぷりの安直品が能く売れると云ふ。特に面白ろきは寒向きのものに我国の懐炉二銭五厘ばかりの品が式法五十参〔割注：我金壺円余〕にて飛ぶが如しと。これは同商店一手販売にて外人の奇を好む伝へつたへてわれもかれも今は貴紳令嬢令夫人のこれを懐中せざるなしと。珍話といふべし。

ホテルにて山田を入れ四人会食後、土耳其談に時を費し夜十一時山田帰る、それよりかれこれ用事を済ませて床に臥したるは夜半一時半なり。六日 日曜日 曇〔割注：霧深し〕朝八時半起床

今日は亜細亜と欧羅破を跨にかくると云ふなる眺望絶美山水の風景に富みて透明なるBosphore海峡に舟を浮ぶに各国の夏期大使館さては土耳其古Sultan〔割注：天子を斯く唱ふ〕の宮殿、松山、兀山、望み得て絶妙と呼ばしめ聽て舟を乗り捨て、山田氏の懇意なる商法会議所書記長Spiruki Alexandridi氏の宅に招待され夫婦其他の手厚き饗応に新鮮の魚類を喫し肉を食ひ酒を飲み飲を尽すばかりにては興なし聊かこれに酬ひん為め只御馳走になるのみなるは不本意且つ我国否なわが君の不名誉なれば共に俱に誘ひてホテルに晚餐を薦め大ひに悦ばして山田と共に夜十時過ぎ逐ひかへす。

君士但丁の開都は最も旧るく耶蘇紀元前六百五十八年に遡りて往古はByzanceと称し東羅馬の所領として時めきコンスタンチン帝の名を取りてConstantinopleと名づく。之れ其濫觴なり。

土耳其は彼の回々教の宗旨を尊び随て一種特異の風習あり。人の妻たり妾たり妙齢の子女、老婆に至るまで悉く我国の被衣よふのものを長くたらしめて容易に顔を見ること能はず他の男子に面接するを嫌ふこと甚だしくそれが為め貴夫人令嬢の供奉には陰部を切断せる黒奴宦官若くは

侍女の左右にありて用を為すと云々。然れども男子は宗教上、正妻四人を持つを許して富豪の人は其他に又多くの妾を貯ふるを得て回々教の占者の誣言に婦人は罪多きものなれば沢山これを養ふは則ち女人を済度して神の教へに遵ふなりと。爰に至りて歐洲風の女尊男卑も行はれず略ぼ東洋の風儀に傾きて我国にはあらざれども此土耳其には野蛮極まる蓄妾蓄男婢の奴隸的売買あり。

此府の人口は九十万ばかりにして土耳其人は固より先づ第一に猶太人あり亜爾弥人あり希臘人最も多く仏蘭西、独逸を初め各種の人も亦雜居す。それが為め宗教遍々にして露国の如きオルトドックス教あり、旧教あり新教あり回々教は無論のこと。偕て通貨は如何に。ピアストルと称して金銀銅貨大小錢其割合はくだくだしければ省略す。

君<sup>マ</sup>府<sup>マ</sup>は七つの丘阪より成りて金角江 (La Corne-d'Or) の水利、大汽船の横着け海身最も深く大尔陀称 Dardanelles の海峡、波士浦 (Le Bosphore) を通じて Marmara 海より容易に黒海に入るべく露英の垂誕三尺、此都を手に入れんと窮々するも亦宜なり。一度ひこれを合すれば亜欧の関鎖茲に成りて覇権を振ふを得べく敢て天下に敵するものなかるべし噫。

金角江は其形ちの角の如くに迂曲りて兩岸の華絶なる為めと各国各地よりの船舶万橋往来して夥多の富源を輸入するとに抛り斯くは名づけしものなりと。而して此江の長さは凡そ十一基米突〔割注：千米突を壺基と云ふ〕幅員平均四百五十米突にして式米突以上四十五米突に亘る江深を有せり。

波士浦又の名、君<sup>マ</sup>府<sup>マ</sup>の海峡 (Déroit de Constantinople) は欧岸三十一基米突に亜岸三十八基米突に延長して亜欧の両大陸を隔て、最短の所は僅々五百五十米突の狭海路にして他の幅員も亦一千、一千二百或は二千米突に過ぎず。眺望偉大壯絶は土人の第一に誇る所にして山水明眉、我三景の一に遊ぶ思ひあり。実に欧亜一とまたぎと云ふ所なり。例に抛り夜を深し

十二時やうやく寝に就く。まだまだこれでも早やき分なり呵々。

七日 月曜日 快晴〔割注：薄霧あり〕朝八時起床

Ottoman 即ち土耳其の曆は大陰曆に基き大小廿九、卅日の隔月を置きて一ヶ年を十二ヶ月に分け三百五十四日と為す故に普通の太陽曆よりは十一日遅く閏年にあつては十二日おくると云ふと雖ども又全くこれにても違算なしとせず露国の曆とも亦異りて面当なるは時間を正示することにして西欧諸国若くは我国にて用ゆるものと大ひに變れば外客のオトマン会社或は土政府の役所に用事ある時は甚だ困難を感ずると云ふ。土耳其の時間は日没より昼夜を十二時で数へて我維新前の太陰曆四つ五つ七つ八つ九つ時など云へると大同小異、其<sup>(13)</sup>を少しく細分せるのみ。然れども日夜の長短に抛り日没を確定すること能はざれば人々の勝手次第にて更らに一定の規則とはなかりしが气象台の建築ありてより以来、旧慣を墨守すれども多少均一の時間を認承して西洋曆と余りに大差なく比較を取るよふになせり。之れ併しながら毎日時計は土耳其の時間に應ずるよふ新時間に巻き合するを要とす。何となれば日没の長短は日々免れざる所にして其差は永久同じからざればなり。之に抛り某会社は欧曆と土曆とをして一目瞭然たらしめんが為め年各月各日を相対して示したる早見表を創造販売し広ろく外人の便利を謀りたりと云へど余は未だ其表を見るの幸遇に接せず。今日は山田寅次郎の照会否な寧ろ得意先なる土国貴顕紳士に刺を通じて面晤したる人々の姓名官職は左の如し。

陸軍中將 アホメット、アリー、パシヤ

Ahmed Aly Pacha〔割注：パシヤは勅任官以上の爵名〕

外務大臣 テーフイク、パシヤ

参事院議長サイド、パシヤ Said Pacha

〔割注：陸軍武官侍従大佐外国人接待掛り長〕マホメット、ベー〔割注：ベーとは奏任官以上の爵名（此人は日本に來りたるこ

とあり)]

見物の箇所は唯古物館の一ヶ所のみにて日暮れとなりぬればわがホテルならぬHotel de Londresにて山田案内者と共に四人食事をりて午後八時半帰舎、山田は道に別れて己れの見世にかへり去る。夜半二時就床。

八日 火曜日 美晴 [割注：わが小春の如し] 朝七時半床を出づ。列氏十五六度。

午前十一時半過ぎよりホテルを出で、まづ山田の商店を訪ひたる後ち唯一日本の此東道者を連れて当代のシユルタン六百年前より羅馬人を逐放して此土耳其、君士但丁に君臨し給ひ万世一系のOsman皇統連綿、臣民の仰ひで神の御子と称し何奈なることも皇帝の御言とあれば取りもなほさず神の御告げなりとして戻くこと能はず又すむくものなきAbdul-Hamid Khan第二世と申し奉る現帝の皇室、宮内省附属の式部局を訪ひ式部長官Munir Pacha其他秘書官等に名刺を通ずるに満悦厚遇、真実顔面に現はれて日本人を慕ひ小松若宮殿下の嘗て土耳其に御慢遊ありたるを初め苟も此都府に一二泊せる同胞人の名を能く記憶して御世事ならず御愛嬌ならず真に我大八洲と良好の友たらんと欲して孜々勉むるが如く然り。御殿の拜見を委托せるに心好く承了して明後十日には必ず許可あるべし。唯今よりすぐに上書して我慕はしき支那大帝国を一戦の下に打ち平らげたる旭日国三外人の足跡を宮中に印するを永く記念とせんなど云ふに厚く其友誼<sup>(14)</sup>を謝してわかる。

それより冬枯れながら今日は珍らしき好天気小春日和に馬車を走らせ郊外野辺の心知よき空気を呼吸して市中に写真帳など求め帰途山田に分れてホテルに入りたるは午後五時過ぎ。

留守中昨今両日に尋ねたる陸軍中将アホメット、アリー、パシヤ及び式部長官ミュニールパシヤの両氏来訪、名刺を置きて去る。

十二時半就眠。

九日 水曜日 快晴 朝六時半早起す。ねむき目を靡<sup>(15)</sup>りながら早起したるはIles des Princes太子島へ舟にてゆかん為めぞかし。昨

夜の風雨に空は晴れても波高く風猶ほ全く収まらざれば一と跨ぎ亜細亜土耳其に歐羅破なる左岸の亜洲海浜まで渡り我比叡金剛田中、日高の両艦長の嘗て懇意を結びたりと云ふ土国海軍少将 [割注：今は予備] Hakki Pashaの邸を訪ひなどして灯台岬に今日怒涛の為め残念ながら行くこと能はざりし太子島を初め数箇の波間に点在せる嶼を眺めIchghadichの山頂に登りて小憩、目の下に君府を一瞰、麻兒馬刺海と波士浦の全景に山水の美を感じ再び舟を航して右岸なる歐洲土耳其に涉りて帰宿す。

山高く登りて見ればゆく舟の黄金の浦やながめたゑなる

漕ぎいで、よもの島山磯の松波間おとづる水鳥のこゑ

此府にて最も普ねく通ずるは仏蘭西語なり。当国には外交其他政務上に該語を最も必要なる第一外国語として同語の教育いと盛んに大臣参議陸海軍苟も謳要顕職にある貴人は固より賤民に至るまで幾分歟此語を解するもの、如し。且西欧文明国中仏人最も多く茲に住居し又仏人ならざるも商店ホテル等の看板は土語と仏語を相対して記載せざる見世とはなき程なり。

世の文明に後れたる土耳其帝国、所領は欧亚の二洲と亜非利加洲に跨れども政度文物遅々として振はず教師には例の赤髭外人を招き陸海両兵の訓練、英仏独の三強国に範を取れども彼の一夫多妻教の結果の一夫に人体を凋衰して初老の将官上長官は早や少しく老疾腎虚の嫌ひなきにあらず概して云へば歐洲中の支那帝国歟。早晚他帝国の併吞を免れず今にあつても既に已に此府の人口は各種外人の土耳其人を超過すと云ひ君士但丁の目抜きなる金角江橋の向ひペラ街Galata町 [割注：旧ガラタの塔あれば斯く名づく] の繁華は多く外人の住居商店なればなり。烏于<sup>(16)</sup>今を去る六百年の以前にあつては希臘、羅馬を圧伏、放逐して茲に帝都を定め上に英雄、下に猛者、隣国露西亞、白牙利、奧地利にまで侵入して雷名を轟かしたる土耳其人も事勢に後れ文明に晩れ新旧軍艦三十余艘を有すれども其



用を為さず我紀州沖の前轍あり。顧みかへりみて前途を謀らざれば波蘭の二の舞歟。今は誠に微々として世の侮りを受くる治外法権の大弱国なりとは嗟。

土耳其人の風俗は上下全体一定の赤き若くは海老色の筒形の上に黒き縵ふさを下けたる我日本にても土耳其帽とて時々人の持て囃やす帽を被れり。往古は云はず現時の服装は別に差して西洋に変らざれども女子は前に述ぶる如く宗教上いつも深窓に蟄<sup>(17)</sup>居して瞥見すること能はず。併しながら時には頭かぶの先から足の末まで貴人は絹布賤女は粗衣、面を覆ひ我婦人の頭巾づきんの如く目ばかり出して徐々往来するを見受けたり、人情は極く実直らしくして近づき易く金銀のことは多く云はず反て我土族風の卑しむ位、それ故にこそ商工業の振はず益々衰微して売り下手なれば何時も外人に好き汁を吸はすると云々。開祖馬哈默マホメットの教へとて犬を殺すことを厳禁し豕を食ふことを許さず鳩は神の御使ひ姫、取れば罰金を科された上、牢に入れらるゝ、苦しみあり。左れば路傍に東洋犬のいと多きこと空間樹上庭園の鳩軍幾千万、浅草の観音様の御堂、仁王門辺よりも猶ほおびたゞし。

遊びながらに終日馬車に揺られ〔割注：特に道悪ろきゆへ〕舟に漂ゆられ綿わたの如くに労れていつになく夜十時半や伏し床にまろび込みて前後知らず。

十日 木曜日 快晴 午前九時起床  
式部長官ミニール、パシヤの上書にて土国第三十三代今上皇帝陛下の許可を得、賸あまつさへ近護の騎兵少佐 Mehmed Ali Beyを附けられて新旧の二大宮殿と御宝物館を拝観せり。この二宮殿には皇帝住はせ給はずと雖ども大祭其他の節は年に二三度づ、御出でありて僧上を初め百官有司の祝詞を受けさせ給ふと云ふ。旧御殿三夾江〔割注：麻留馬刺海、波士浦 金角江、〕に面し新御殿も亦波士浦海湾に接して亜細亜海岸の山々、呼べば答へんと欲し何とも云へぬ美風景、新は歐洲風の大離宮、旧はその名ちなに縁める古御所、此方が珍しく雅致ありわが目には変りて面

白ろし。われわれの土耳其、君士但丁コンスタンチノープルに來りたるは余り好時季にあらず当府は緑葉した滴らんとする四月以向六月若くは秋の景色の金風そよ戦ぐ九月より十一月を最上とす。故に土耳其人に遭ふごとに今は冬の時節にてなんにもなし真の風景を賞せんとならばふただひ來夏の御來遊を待つなど云はるゝもおかしく、わが日の本と似たる所はホテルなどは西欧諸国と変らざれども一家々々には皆な居室あたを温むる為め火鉢よふの銅桶かなおけを設けて炭を熾し火箸おこもあり、今は大低椅子なれども田舎と云はず宮殿にも蒲団を敷きて座するよふなりたる所又少なからず。婦人はじかに往来を見ること能はず、窓毎に目隠しありて其隙間より僅に市中をそのすきまかいまみるを得のみ。猶ほ此他に目新らしき繹いとの沢なれども、まづこの位ひにて筆をさしをか。今夜はホテルへ海軍中將アホメット、アリー、パシヤを招待し山田をも招きて晚餐を喫し土耳其談議に夜を深しぬ。十二時半過ぎ入床。

十一日 金曜日 快晴〔割注：午后三時より曇る。小雨じきにやむ〕 朝八時起床。

毎金曜日には皇帝陛下星月城〔割注：現天子の御居城〕を出で給ひて御行列おごそ厳かに城内の馬哈默マホメット寺に御参詣あらせらる。此御通輦を拝観せんとて去る七日外人接待掛長陸軍歩兵大佐マホメット、ベー氏に委頼し置きたれば午前十一時過ぎよりゆき城内に入りて接待館に伴はれ土耳其咖啡、紅茶など振舞はれ例の歓遇にて椅子に掛かりつゝ、洋窓より真向ひの寺院え御成りをまつに十一時頃より水陸各兵白馬黒馬の騎兵隊、服帽奇なる亜刺比亞兵、新王貴公子乗馬にて敦盛様の面影おもかげあり色しろじろの美少年、正装威あつて勇ましく、年は二八か二九からぬ二七二六の優姿やさすがた、蒔くやまき沙、通御の道に、亮々響く音楽隊、捧げ銃の号令に紅簾深き御馬車のうち皇后陛下皇女達、女官と共に四輛にて寺門を入りても出で給はず天皇陛下を御待ち受け、式済むまでもいつまで御帰へりまでも遂に馬車より出で給はぬが法ぞかし。

塔頂に登りて大僧上は祈祷をこらし百官文武大

臣は寺門の両傍に参列し亭午も早や少し過ぐる  
土耳其時計の八時と敷軍服の上に外套を召し彼  
の有名なる白長髯の侍従長オスマン、パシヤの  
御陪<sup>(18)</sup>乗にて金服の馭者は徐々御車を轡せ  
つ、左右前後に護親兵を従へ給ひ万歳の声と共に  
寺の階級<sup>きざし</sup>を登りて終に寺中に入り給ふ。

マホメット教にあらざれば寺内に入りて此式を  
見ることは能はず。式は二十分ばかり。還御なり  
兵も去り馬車も去り、なにもかも済んだる午後  
二時頃厚く掛りの人に礼云ふてホテルに帰る。  
めづらかな御行列を見たるものかな。

星月城 (国旗の図) [割注：星と月は土  
耳古帝国の国旗御紋所]

「鎌倉山にあらずして とほくとるこの 星月夜  
月をみなされ 三日月を 星をおみやれ  
雲間にひかる 光る月より またほしよりも  
見たやみせたや ひめたちを」

夜十二時過ぎ入床。

十二日 土曜日 雨 午前八時床より出づ。  
雨に風さへ添へてければ今日は終日室内にたれ  
込めて外遊の愉快を得ざりき。

金角江に棹さして摩兒馬刺海をながめつ、  
兩大洲の山々を望みて読める

金が浦漕ぎ出て見れば山々も海の名さへに丸  
まらと呼ぶ

処女塔 (Tour de la Fille) 今日終日たれ込  
めたれば此処女塔の御話しでも御慰みに申上げ  
てみましやふ、波士浦<sup>ボスフオール</sup>の入口亞細亞洲<sup>スカタリ</sup>Scutari  
町に面して其海岸を離れたる所に一つの岩があり  
舛、その岩の上に四角な塔が見へる。是れが  
所謂る土耳其人其他のもて囃やす処女塔です、  
今は灯台の代りをして居ますが此塔は其昔し或  
る土耳其の王様に御姫様が御降誕になりまして  
或る占者に見て貰ひますと此御子様は蛇の為め  
に御命が危ふひと申されましたから王様は非常  
に御心肺で色々御考への上、右の塔を海の中  
に立てさせまして虫類は一切そこに這入らなひ  
よふに堅固に出来上り御姫様をそこへ御入れ申  
上ました、所でだんだんと御成長になりまして  
誠に御美麗<sup>うつく</sup>しくかいまみては仇な思ひを焦す人

も沢山なうちに波斯王<sup>ペルシヤ</sup>の太子が殊の外の御執心  
で何とかして思ひのたけを書き送りたいきものと  
千々に心をいため給ひそれこそ潜心御熟慮の  
上、やうやく御方法<sup>てだて</sup>を得たまひ花束の中に恋文  
を隠して御入れになり遂に御送りにになりました  
が不運にも此花の中に小蛇が居たのに御気が附  
きませんでしたから御姫様を噛みまして御命も  
御危き所え波斯<sup>ペルス</sup>の太子にあらぬ姫君の真の情人  
が現われ出で蛇を殺し御疵口<sup>きづくち</sup>の毒を吸ひ取りて  
御姫様の御命を助けました、土耳其国王、これ  
を御聞きになり姫の命の親なりとて大層御悦び  
且つ其勇気を御賞美になりまして終に御姫様を  
此情人にくだされました、それからして此小塔  
を処女塔と名づけた、則ちこれが其起因だとか  
申します、随分我小説伝奇ものにもでもありそふ  
な御話しです。

夜に入り山田来る。十一時過ぎまで話して帰る。  
同十二時入床。

十三日 日曜日 快晴 朝八時半おきる。  
去る十日夜食に招待したる反礼敷今日は彼の陸  
軍中將なるアホメット、アリーパシヤより午食  
に招かれてゆく。土耳其料理の一風変りたるあ  
ぶら濃き饗応に舌もぬめるばかり。食後暫らく  
話して午後二時パシヤの宅を辞し郊外散歩、土  
耳古固有のわが琴、三味に似たる絃楽の彈奏を  
聞きなどして帰る。時に十一時半なり。十二時  
過ぎ就眠。

明治廿九年十二月十三日土耳其君士但丁府  
ペラ、パラス、ホテル三階の一幽室にて認む  
斎藤勇見彦日記

御令扶様 御中

### 通報第38号

十四日 月曜日 美晴 朝八時起床。 [割  
注：午后四時頃より雲出づ]

倫敦正金銀行よりの電報為換をオトマン銀行に  
ゆきて受領したる後ち土耳其辱知の大臣紳士を  
訪問して暇乞ひす。明日午后塙地利<sup>オーストリアコロイド</sup>Lloyd会  
社の汽船にて希臘<sup>ギリシヤ</sup> Pirée港え向け出立の筈なれ  
ばなり。土耳其に今一つ可笑しきことあり。

ラマザン  
Ramazanの祭日と称して日出より日没まで十五日間断食することあり。その代り貴賤を問わず知不知を論ぜず夜に入りては互に訪問し合ひ飽食飲酒、<sup>あらか</sup>予じめ来客の幾十百人あるを知らず。また富豪の家にては此国に名物なる羊を屠りて貧民に施すと云々。

外国郵便はあれども珍らしきは此君士但<sup>コンスタンチノープル</sup>丁市中に郵便の設けなく其便利を知らざるにあらねども多妻教の淫風盛んなるが為め種々の弊害醜聞を拒ぐためなりと。それ故に市中に住む人は電報或は走り使ひに手紙を托するの外なしとは臆。

十五日 火曜日 晴 朝七時おきる。

別るゝに臨み山田寅次郎氏に寄す。

君ならでことをとるこに人はなしいとひたまへよ我国のため

一と本もさすがやまとの菊なればたれおとらじと匂ひぬるかな

午後三時君士但<sup>コンスタンチノープル</sup>丁Pera Palace Hotel<sup>ベラ パラス ホテル</sup>出立、<sup>オーストリア</sup>埃地利ロイド会社のEspero号に乗船、山田寅次郎氏船まで見送る。互に名残りを惜しみつゝ、同五時出帆、西と東に別れ希臘<sup>エスベロー</sup>ピレー港を指して船は徐々として黒烟を吐きつゝ、ゆく、波平らかに水清く太陽は将に西の端に入らんとするの黄昏<sup>たそがれどき</sup>なり土都を離るゝに望み詩あり。曰く、

新月城 [割注：七言律詩] 平起 未定稿  
金波銀浪海東西、亜水欧山指顧中、処女塔台連曲浦、鏡光公子島無窮、土邦文化猶維幼、星月城頭蛮野風、<sup>ナニコトゾ</sup>底事華顔王者寵、三千典侍隱深宮、伏乞清風

[割注：処女塔、公子島は前既に言ふ。今説明するに及ばず]

航海三十四時間にて明後十七日午前三時ならでは着ぬと云ふ。上陸希臘<sup>つか</sup>国の地を踏むは同六時頃にもあらん。

夜十時キャビンの寝台に眠る。

おわりに

本稿においては、斎藤勇見彦が記した『御巡回日記』に基づいて徳川頼倫一行のイスタンブル

ルでの行動概要を明らかにすることと、『御巡回日記』の関連個所のテキストの提示に注力した。その結果、この史料が、いくつかの点において、山田寅次郎と中村商店の実証的研究に資するものであることが確認された。

斎藤は他にもイスタンブルにおける見聞や所感を様々に書き記している<sup>(19)</sup>。斎藤は、得意のフランス語でトルコ人と直接対話することもできたはずであるが、彼にとって最大の情報源はやはり山田であったと推察される。この事情は鎌田栄吉の場合も同じであろう。しかし、両者が選んだ話題と論調にはかなりの差異がある。こうした点についての詳しい検討は、別の機会に譲りたい。

<注>

- (1) 紀州藩士斎藤政右衛門実村（のち桜門と改める、1821-1898）の次男。実村は紀州藩の勘定奉行、参政などを歴任し、維新後は紀州徳川家の家令となった。勇見彦は、1882年（明治15）に東京外国語学校の仏語科を修了した後、紀州徳川家に入った。陸軍お雇いフランス人音楽教師シャルル・ルルー（Charles Leroux, 1851-1926）の通訳として、陸軍戸山学校に勤務した時期もある。欧米旅行からの帰国後は、頼倫の命を受けて紀州徳川家の家蔵書籍の整理に当たり、1902年に邸内に開かれた南葵文庫の主幹を務めた。編書に『南葵文庫概要』、『紀藩士著述目録』、『葵廼雫』等がある。実村の経歴については和歌山市博物館（2017：66-67）、勇見彦のそれについては吉永（2005）を参照した。
- (2) 1896年7月7日夜、リージェント・ストリートのカフェ・ヴァレーズ（Café Verrey's）で、頼倫の妻久子の懐妊祝いを兼ねた紀州出身者の集いが開催された。吉永（2005）は、この会を南方熊楠（1867-1941）と頼倫との最初の出会いの場として重視し、『御巡回日記』に基づいて、その日時と状況を確定すると共に、各出席者の経歴を紹介している。またケンブリッジ大学留学とされることの多い頼倫のイギリス留学の実

情についても修正意見を出している。

- (3) デュンダル・三沢 (2009:184) が示す名前は、スピルキー (Spiruki) ではなく、スピラキ (Spiraki)。なお12月6日の日記に書かれた彼の肩書である商法会議所書記長は、正しくは商工会議所書記長である。
- (4) 12月7日の日記によれば、この人物には来日経験がある。アブデュルハミト2世から明治天皇に贈られた馬2頭を届けた侍従武官メフメト・ムラト大尉と同一人物か。長谷部・三沢・レヴェント 2018:88参照。
- (5) イスタンブルにおける徳富・深井の行動はデュンダル・三沢 (2009:183-184) によって部分的に復元されている。
- (6) 1896年11月7日付の徳富宛書簡において、山田は「当地へ御滞在中は店無人の為め御案内等も充分出来不申失礼のみの段不悪御海容被成下度候」と述べている (デュンダル・三沢 2009:218)。また1897年2月17日付の徳富宛書簡では、店の繁盛ぶりを「唯だ唯だ店に至れば千客万様の人々来るあり (…中略…) 種々の人々往来日に繁ければ話しにまぎれ不識間に日を暮し居候次第第二御坐候」と伝えている (デュンダル・三沢 2009:213)。
- (7) 原字は糸偏に亘。
- (8) 原字は糸偏に亘。
- (9) 朝比奈が寺内にイスタンブル行を勧めたのも同じ頃、サンクトペテルブルクにおいてと考えられる。デュンダル・三沢 (2009:188) は、寺内の伝記の旅程に関する記述 (黒田 1920:208) が錯綜していることを指摘し、別史料で確認する必要性を説いている。この問題に不十分ながら答えると、『御巡回日記』によれば、頼倫一行は、11月8日にペテルブルクの日本公使館で開かれた晩餐会の席で寺内に会っている。寺内は前日朝にイギリスからロシアに転任する外務省書記官国府寺新作 (1855-1929) と一緒にペテルブルクに着いたという。この晩餐会には朝比奈も招かれていた。頼倫一行は、それ以前の11月3日にベルリンの日本公使館で開かれた天長節

奉祝会でも寺内に会っている。従って、寺内が11月中にベルリンから露都 (ペテルブルク) に向かったとの寺内伝の記述は、大筋で事実と考えられる。

- (10) 1896年12月29日付の徳富宛書簡において、山田は、頼倫一行の「出発後二日にして寺内少将立花大尉を伴ひ来京六日間滞在…」と書いている (デュンダル・三沢 2009:215)。
- (11) 山田と中村一族との関係については、デュンダル・三沢 (2009) を参照せよ。
- (12) 原字は巾偏に合。
- (13) 原字は其の古字に似たもの。
- (14) 原字は立心偏に亘。
- (15) 原字は靡にりっとうを加える。
- (16) 原字は雨冠の下に于。
- (17) 原字は藝から草冠を取った形。
- (18) 原字は日偏に音。
- (19) 12月5日の日記は、エルトゥールル号の遭難事件を明治22年の出来事とするが、これは明治23年の誤りである。

#### <参考文献>

- \* 鎌田栄吉 1899『欧米漫遊雑記』博文館。
- \* 黒田甲子郎 (編) 1920『元帥寺内伯爵伝』元帥寺内伯爵伝記編纂所。
- \* 白岩一彦 1999「明治期の文献にみる日本人のトルコ観」, 池井優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』勁草書房, pp.4-41。
- \* デュンダル, メルトハン, 三沢伸生 2009「イスタンブルの中村商店をめぐる人間関係の事例研究: 徳富蘇峰に宛てられた山田寅次郎の書簡を中心に」『東洋大学社会学部紀要』46 (2): 181-220。
- \* 長場紘 2000『近代トルコ見聞録』慶應義塾大学出版会。
- \* 長谷部圭彦, 三沢伸生, シナン・レヴェント (編) 2018『オスマン帝国と日本: トルコ共和国首相府オスマン文書館所蔵文書に基づく両国間関係 (早稲田大学 史料展示会2017年)』東洋大学アジア文化研究所。

- \* 山田寅次郎 2016『土耳其画観』（復刻版）方丈堂出版。
- \* 吉永武弘 2005「徳川頼倫と南方熊楠の出会い—ロンドンにおける紀州出身者の集いとその日付問題」『関西英学史研究』1：9-16。
- \* 和歌山市立博物館（編）2017『特別展「幕末の紀州藩」』和歌山市教育委員会。

※本稿を草するに当たり、三沢仲生先生より懇切なご指導を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

（客員研究員／高野山大学文学部教授）

**Tokugawa Yorimichi and His Party's Visit to Istanbul  
As Recorded in the *Ōshū Gojunksaichū Nikki*  
by Saitō Yumihiko**

OKUYAMA Naoji

The *Ōshū Gojunksaichū Nikki*, or 'A Diary of the Tour in Europe' (manuscript, private collection) written by Saitō Yumihiko (died in 1917) is a record of the tour of Europe and America by Tokugawa Yorimichi (1872-1925), the heir of the Kishū Tokugawa family and his two attendants, Kamata Eikichi (1857-1934) and Saitō Yumihiko from March 1896 to November 1897. This diary gives detailed information about Yorimichi and his party's visit to Istanbul that is not available elsewhere. According to the diary, they arrived in Istanbul by train on 5 December 1896 and stayed there for eleven days before leaving for Athens by ship on 15 December of the same year. During this period, they visited various places in the city guided by Yamada Torajirō (1866-1957) of Nakamura Store, met people through his introduction and heard about Turkey from him. Saitō's description of Nakamura Store's assortment of goods is also considered valuable. This paper provides an overview of Yorimichi and his party's activities in Istanbul based on the diary and presents the texts of the relevant parts of it.

Key words: *Ōshū Gojunksaichū Nikki*, Tokugawa Yorimichi, Saitō Yumihiko, Yamada Torajirō, Istanbul